

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.124

2014. 1. 1

謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 -

塚本師也

第11回 阿玉台式土器の細分(5)

〈阿玉台Ⅳ式土器〉

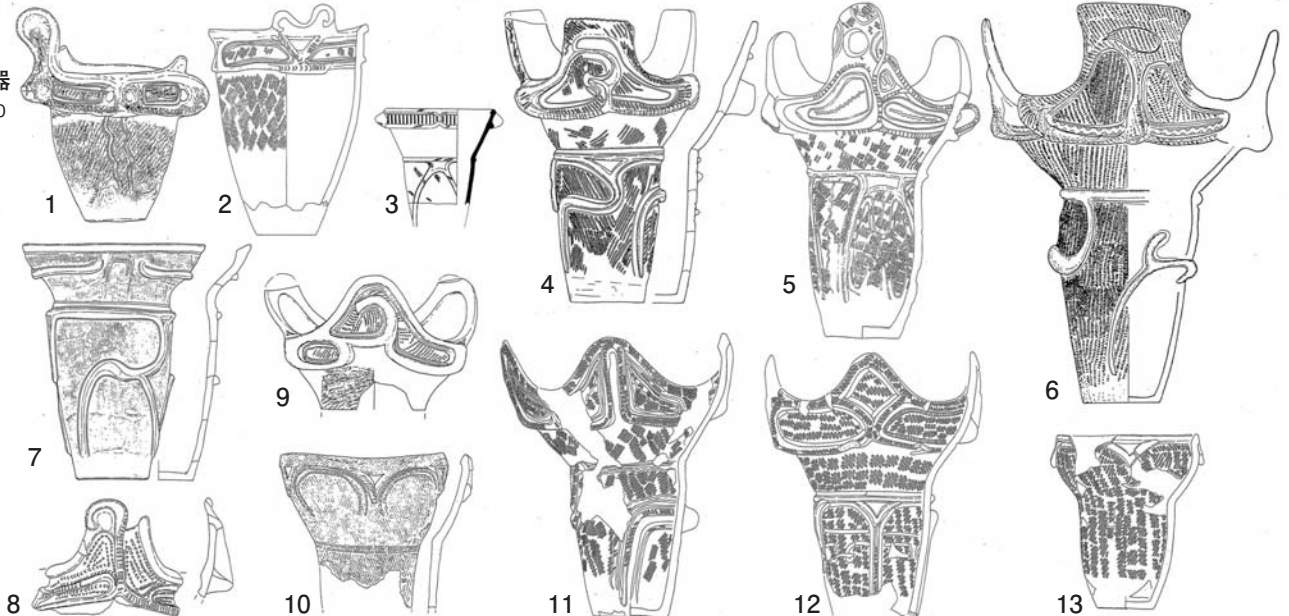
阿玉台Ⅳ式は隆帯に沿って沈線文を施す。五領ケ台式末以降続いてきた工具を押し引きする手法はここで途絶える。但し、並行する勝坂式末の粗大な三角押文(第7図8)や大木式の有節沈線(第7図10)を受容するものもあり、一部に押し引きによる文様も残る。施文域の3帯区分、逆U字状(第7図3・5)や直線的懸垂文(第7図12)、平縁と波状縁の併用、V字状突起(第7図13)など、阿玉台Ⅱb式以降の伝統を踏襲する。阿玉台Ⅲ式に始まったクランク状の懸垂文(第7図4・6・7・11)や口頸部に横位のS字文を配した土器(第7図7)も引き継がれる。隆帯は阿玉台Ⅲ式より太く粗大化する例が多い。直線的に立ち上がる胴部から、60°に近い角度で頸部が開き、口縁部下端が鰹を張つ

たように突出する、阿玉台Ⅲ式期に多いプローションは、引き続き存在する(第7図4~6・11・12)。一方で、直線的な短い胴部に、直接分厚い隆帯による区画文を配す寸詰まりな器形(第7図1・2)が目立つようになる。波状口縁の波頂部は平坦なもの(第7図4・7)と尖るもの(第7図11・12)がある。円環状もしくは中央を窪めた円盤状の突起を付けるもの(第7図5)もある。波状口縁そのものが低く、頂部にかけて全体が丸味をもつものもある(第7図9)。縄文施文は阿玉台Ⅲ式よりも増え、大半の土器が縄文を施文するようになる。並行する大木式同様、縦方向に間隔を開けて施文するものもみられる。大木式が2段LR優勢であるのに対し、阿玉台式は2段RLが優勢であり、大木式の縄文施文をそのまま受容してはいないこと

を、堀越正行が指摘している(堀越2008)。

西村正衛による利根川下流域の貝塚の発掘調査では、阿玉台Ⅱ・Ⅲ式との層位的関係はとらえられなかった(西村1972)。阿玉台Ⅳ式土器は、阿玉台Ⅲ式と共伴する例が多く、その年代的な独立を疑問視する意見があるが、茨城県東大橋原遺跡B-6号、E-8・9号土壇出土土器は阿玉台Ⅳ式のみで構成される。他にも異系統の土器を含むものの、栃木県檜の木遺跡A40土坑、槻沢遺跡14H-P2では出土する阿玉台式は全てⅣ式である。霞ヶ浦北岸以外では、異系統の土器と共存する。中峠式の交互刺突文を取り入れたキメラ土器も存在する(第7図6)。なお、阿玉台Ⅳ式系統の土器が加曽利E1式期になっても存続することを江原英が指摘している(江原2006)。

第7図
阿玉台
Ⅳ式土器
縮尺: 1/10



1・7・10. 栃木県御霊前遺跡 2・5. 栃木県槻沢遺跡 3. 茨城県村田貝塚 4. 栃木県御城田遺跡 6. 栃木県添野遺跡 8. 栃木県竹下遺跡 9. 東京都恋ヶ窪遺跡 11~13. 茨城県宮後遺跡

【参考文献】

江原英、2006、「阿玉台式の伝統と「中峠0地点型」の成立(覚書) - 寺野東遺跡と島田遺跡出土土器の観察から -」『栃木県考古学会誌』第27集、栃木県考古学会
西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年的研究の概要 - 利根川下流域を中心として -」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科
堀越正行、2008、「千葉の貝塚に学ぶ」

【出典】

1・7・10. 栃木県教育委員会、2000、「御霊前遺跡I」
3. 西村正衛、1984、「石器時代における利根川下流域の研究」
6. 市貝町教育委員会、1974、「添野遺跡の研究」
9. 国分寺市教育委員会、1979、「恋ヶ窪遺跡調査報告I」
2・5. 栃木県教育委員会、1980、「槻沢遺跡」
4. 栃木県教育委員会、1987、「御城田遺跡」
8. 宇都宮市教育委員会、1989、「竹下遺跡II」
11~13. 茨城県教育委員会、2001、「宮後遺跡I」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の細分(5)	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第117回)	小松 学 …3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第13回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『図録・石器入門事典(先土器)』	脇 幸生 …4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第13回)

渡辺 誠

14. 角田文衛先生の幅広い人脈

奉職した平安博物館は、考古学協会が運営するものであるが、ここは厚い熱意をもって角田先生が設立した学術的組織である。いつも言われていたことであるが、学問には目的学と手段学がある。考古学とか文献史学というのは後者である。しかし自分の目指すものは古代の研究であり、古代の考古学とか文献史学といったバラバラのことではない、両者や他のものも含め、幅広く総合的に研究する必要があり、その実践として大阪市立大学助教授時代の昭和26年に古代学協会を設立し、後に昭和42年に京都に平安博物館を設立された。

この古代学の構想を深めるため、ご自身の努力に加え、多くの先生方との親交を深められた。もちろん私にはその全貌を知る由もないが、私にとって強く記憶に残っているのは、建築史の福山敏男先生、地理学の藤岡謙二郎先生、神話学の松前 健先生、それに関西大学の横田健一先生、大谷大学の五来 重先生、瓦の神様と呼ばれた木村捷三郎先生、文献史学の黒坂伸夫先生と奥様の永井路子先生、池田源太先生等々である。

とりわけ今でも、奥様からお聞きした松前 健先生のお仕事の仕方は、私の場合に大きく影響を残している。松前先生は講義や講演の場合、その前にすべて原稿を書いているということであった。もちろんパソコン以前である、また五来学長との関係で、大谷大学へ上野佳也先生が出講していたが、東大へ戻られた時に私が引き継いだ。しかし正規の学生ではなく、もぐりの他大学の学生の方が熱心であったのがおかしかった。

五来先生は修験道の研究でも有名な方であった。角田先生との懇談で陪席させて頂いた時、修験者こそもっとも縄文の伝統を伝えているのかも知れないと言われたことは耳に残っている。

また平安博物館によく立ち寄って下さった岡崎 敬先生も忘れられない。先生は母校京都大学の人文科学研究所の帰りに寄られたのであるが、すぐ北側の御池通りに関西空港へ行くバスの停留所があったことが便利であったためである。生態学の梅棹忠夫先生に紹介して下さったのも岡崎先生である。目立ったらしく、角田先生がどういう関係かと聞かれたことがあった。当時テレビのシルクロードの御指導で、東洋史

出身の私にはまぶしくそのお話を伺ったものである。恩師の松本信広先生と親しくしておられたこともあって、目をかけて下さったようである。

帝塚山大学の堅田 直先生も石付喜三男氏との関係で学生時代から存じ上げていたが、平安博物館奉職後間もないころに、主催される帝塚山大学考古学談話会で話す機会を作って下さり、いろいろな方にご紹介くださって、早く関西になじむように気を使って下さった。

15. 江谷 寛先生とのこと

上記の先生方以上に関係が深くなり、かつ親切にして下さったのは、当時高校教諭であった江谷先生である。運転が好きで上手であるばかりでなく、定時制のため昼間はあちこちこまめに調査に出かけていた。そして私も時間の制約がないため、できるだけ一緒にすることになっていた。特に関西の遺跡を知らないばかりか、一般的な地理感もない私には、大変ありがたいことであった。関西ばかりでなく、遠方にも連れて行って頂いた。東は東京・長野、西は徳島・鳥取までである。とりわけ鳥取では亀井照人先生とお引き合わせて下さり、後に縄文後期の鳥取布瀬・桂見遺跡といった低湿地遺跡の調査に加わることができた。また旧福部村では、谷岡陽一氏とともに同様に後期の栗谷遺跡を発掘した。ドングリ類を含む貯蔵穴群と、木製の杓子なども発掘し、縄文時代の食文化の研究を一段と推し進めることができた。カゴ類の出土した布瀬遺跡なども同様に大きな示唆を与えてくれることになった。

後に名古屋大学に移ってからも、イタリアのポンペイ遺跡の発掘調査に誘って下さり、その折にアマルフィのアジアから伝わった紙工場の見学に連れて行ってもらい、大きな恩恵を受けたことは、すでに記したとおりである。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
 昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
 平成元年4月 同上教授
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 117

矢口遺跡 ～ 長野県塩尻市

小松 学

長野県の中央に広がる松本平の東南部に位置する東山山麓は、縄文中期の環状集落として知られている俎原遺跡

をはじめとして、縄文時代を中心とした数多くの遺跡が分布する遺跡の密集地である。今回紹介する矢口遺跡もこの

山麓域に立地している。

私と矢口遺跡との出会いはだいぶ前に遡る。今はもう過去の産物になってしまった感がある、いわゆる「考古少年」であった私は、小学生の頃半日くらい時間が取れば自転車に乗って仲間たちと遺跡にでかけ、夢中で土器や石器を探していた。その時、この矢口遺跡にも表採に訪れたことがある。

小学5年生のある日、習っていた剣道の先生から「あそこに行けば土器や石器が拾えるぞ」と言われ、心躍らせながら矢口遺跡にでかけていったことがあった。遺跡周辺は山林の中の狭い畑と牧草地になっていた。その時何時間か表採したが、わずかな黒曜石片と土器片があっただけで、めばしいものは見つからなかった。それ以降、あまり魅力を感じない矢口遺跡に再び足を運ぶことはなかった。

その後1984(昭和59)年、私が高校1年生の時に、東山山麓地区農道整備事業に伴う発掘調査が矢口遺跡(当時は山ノ神遺跡と呼ばれていた)で行われることになり、作業員として数日間調査に参加した。その間遺構検出のため一日中ジョレンで土を削ったが、ほとんどと言っていいくらい何も出ない調査で、いい思い出はなく、発掘調査でもこんなこともあるんだと思い知らされた。

なお、この時の調査は、820㎡の範囲で行われたが、土坑41、集石1、溝状遺構1、ロームマウンド10が検出されたに過ぎず、出土遺物も少なかった。唯一の救いは伏襲を伴う縄文中期末の土壌墓が見つかったことである。

時は流れ、大学で考古学を学んだ私は、塩尻市役所に就職し、農林課で道路建設や下水道整備といった考古学とはまるで正反対の職務を経験した後平出博物館に配属となった。

1993(平成5)年、博物館勤務となり最初に調査を担当することになった遺跡がこの矢口遺跡であった。長野県総合教育センター建設に伴う発掘調査で、調査面積は6,000㎡という比較的大きな調査であった。

本格的な発掘調査に入る前に現地を訪れ、十数年振りに畑を歩いてみると、やはり僅かな土器と黒曜石片が拾えるくら



▲矢口遺跡全景

いであった。心の中で「やっぱりだめか…」とつぶやいた記憶がある。

発掘調査は6月から8月にかけて実施された。過去の調査では縄文中期末の土壌墓が見つかったことから、今回の調査でも中期の土壌墓の続きでも見つければと考えつつ調査を開始した。調査を進めていくと予想とは異なり、縄文中期ではなく縄文前期初頭を中心とした遺物が出土するようになり、それまでの認識を新たにすることになった。

傾斜地でさらに大小の礫が混じるという、決して掘り易いとはいえない状況であったため遺構検出作業には苦勞したが、次第に住居跡とともに多くの土坑があることが明らかになってきた。最終的には、前期初頭を主体とした住居跡が中央広場を囲むように16軒検出され、松本平はもとより全国的にみても環状集落の初現的な様相を示す遺跡として、全国紙の1面にも取り上げられた。

調査の概要として、まず検出された住居跡をみると、住居形態は不整形円形や不整形方形といった定形的ではないものが大半であり、柱穴の規模や配置に統一性はみられなかった。炉については7軒で確認されたが、すべて地床炉であった。

土坑も143を数え、大きく二郡に分かれていることが確認された。一群は住居と同じ時期のもので、集落の中央広場を中心に住居周辺に分布するもので、検出された土坑の多くが該当する。もう一群は、1984年の調査で発見された土壌墓と同じ縄文中期後葉から後期前葉の土坑で、位置的にも以前調査された土壌墓の周囲にあたっている。しかしこれらの土坑を調査した結果、副葬品を伴う明確な土壌墓と考えられるものはこの調査で確認することはできなかった。

出土遺物としては、1991(平成3)年に長野県北佐久郡御代田町の塚田遺跡や下弥堂遺跡の発掘調査で出土し話題となっていた縄文前期初頭の縄文系尖底土器の一群と同様な土器が矢口遺跡からもまとまって出土し注目された。折しもそれらの土器を下平博行氏らが「塚田式」として提唱しようとしていた時期に重なったこともあり、さらに注目されることとなった。

このように、矢口遺跡の調査では集落のみならず遺物の面でも想像を遙かに超えた大きな成果をあげることができた。あの遺跡がまさかこんな遺跡になろうとは。まさに遺跡は掘ってみななければ分からないということを痛感させられた遺跡であった。

しかし、このように貴重な成果を残した一方で、報告書を改めて見直すと、あまりに不十分な内容で情けなくなってしまう。初めて編集を行ったという経験不足、報告書を年度内に刊行しなくてはならないという時間的制約などなど言い訳はいくつも思い浮かぶが、とにかくこの遺跡を生かすためにも再報告をしなくてはならないという思いを強くした。

これから先もまだまだ矢口遺跡との付き合いは続きそうである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは竹原 学さんです。

考古学者の書棚

「図録・石器入門事典〈先土器〉」

加藤晋平・鶴丸俊明／柏書房(1994)

脇 幸生

今回、紹介する本は、柏書房刊行の『図録・石器入門辞典〈先土器〉』です。石器を勉強する(している)人のなかで読んで当然?というくらい有名な本なので、紹介すること自体がそもそも間違っていると考えましたが、我が家の書棚にあったので、紹介します。

本書の構成は、以下の通りです。

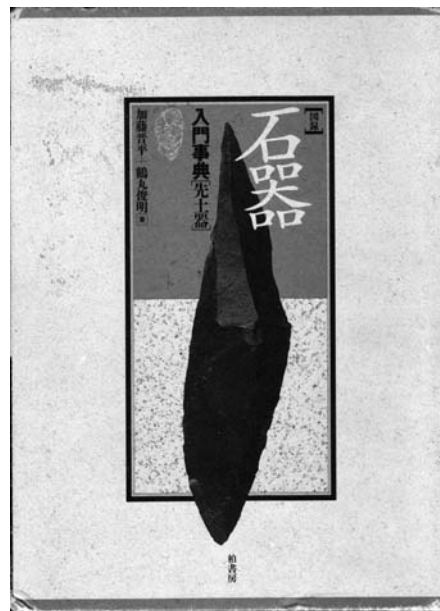
序-石器とは

- I 石器のある場所
- II 石器の発掘と整理
- III 石器の分類の方法と製作工程
- IV 石器の種類
- V いろいろな石器
- VI 石器の原材
- VII 石器の分類と観察
- VIII 石器の記録と計測
- IX 石器の作り方
- X 石器のはたらき
- XI 石器の研究と自然科学
- XII 時代区分と編年
- XIII 東アジアの旧石器文化と日本の先土器文化

この本の特徴は、書名に「図録」とあるように、全体を通して実測図または写真が多いことである。通常であれば、図は文章を補完するものとして用いられているが、本書は文章が図を補完しているような印象を受ける。私自身、誰かに石器を教えてもらったわけではない。本書を読んで分かるようになったのだから、考古学を学んでない一般の人でも容易に読めると感じる。

私が特に見ている箇所はⅢ・Ⅳ、Ⅷである。Ⅲでは、石器から情報を得るため分類作業の重要性を説く中で、石器の割れ方、技法、加工(調整)の分類を紹介している。整理作業で、石器の整理に携わったことが人に説明するときはこの箇所を資料として渡している。調整の名称がシンプルなので、どのような加工(調整)が行われているかが、イメージしやすい。また石器に至るまでの製作工程を示した図は、複雑な工程を経た石器の説明の際には好評である。

Ⅳでは、石器個々の分類基準を明確に述べる。説明している石器は模式図で示され、必ず文章の横にある。調整が似ている場合には、その差異も述べており、混乱することはまずない。石器になじみのない人でも、視覚的に石器の違いが判断できるだろう。経験者にとっては、器種分類で時々迷うことがあるかもしれない。その際に、分類基準の整理を行



う意味で、本章を見ではどうだろうか。簡単であるが「なるほど」と思うようなことが見えてくるかもしれない。

Ⅷは、実測について述べている。仕事柄、石器を書いたことがない人たちに教える際には、これを用いているし、これを見て覚えるように勧めている。近年石器の実測について市販されている書籍をちらほら見かける。見るという書きすぎている感があり、なかなか好きになれる。しかし、これは簡単であり、かつ執筆者の感想や、注意する箇所が述べられているので、必要なポイントが良く分かるだろう。

本書は、学部生時に購入した書籍である。土器研究をしたいと思って入学したが、その土器が理解できず、石器に研究対象を変える時に講師の方に「非常に分かりやすい。」と勧められ、すぐさま生協に走った記憶がある。その後、執筆者の加藤晋平先生が通っていた大学の教授であることを知り、友人とサインを頂きに研究室まで行ったことを覚えている。

私に石器を教えてくれた本書は、まさにバイブルである。判断に迷う時があれば、まず先に本書を開く。書いてあることは、いつ見ても同じだが、新鮮さはいつまでも変わらない。

アルカ通信 No.124

発行日 2014年1月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp